

広告 企画・制作 読売新聞社広告局



第13回 アメリカ合衆国

- 後列左から 森下 瑞紀さん 小川 夏生さん
前列左から 小川 夏生さん 谷口 朋さん 佐藤 詠美さん



成田から空路、ロサンゼルス経由で到着したフレズノはカリフォルニア州の中央部に位置する。夏の陽光が容赦なく照りつけるが、雨がほとんど降らないとあって、カラリと爽やかな空気感にあふれる。道の両脇にはアーモンドやトウモロコシ、ワインの原料となるブドウなどの農地が広がる。



この豊かな農業地域でOIAM社は、トマト、アーモンド、タマネギ、ニンニクの生産・販売を手掛ける。三菱商事OIAM事業部の高橋頼輝さんの案内で、OIAM社の加工用トマト農場に到着した。

「責任ある成長」で飛躍 三菱商事 OIAM社と提携
三菱商事の海外ビジネス最前線を高校生が訪問、取材してリポートするシリーズ企画「海外プロジェクト探検隊」。

持続可能な生活と産業 高校生が米国全力取材

フェアトレード 開発途上国の産品を適正な価格で継続購入することで、労働者の生活向上と自立を促す貿易の仕組み。

「有機栽培商品は値段が高くなるが、米国人の購買状況は？」 「フェアトレード商品の認知度は？」

石川 三三 三菱商事ロサンゼルス支店長
OIAM社取材を終えた高校生たちは、フレズノから空路でロサンゼルスへ。

倫理的な消費の広まり フェアトレード商品に関心
米国では有機栽培商品は富裕層を中心としたトレンドだが、自然食品を多く取り扱う大型スーパー「ホールフーズ・マーケット」チェーンが売り上げを伸ばしているほか、一般のスーパーも有機栽培商品を置くようになっている。



あたらぬ。なんだか奇妙な光景に思えたが、作物への給水は100%「ドリップ灌漑システム」を使用していると聞き、み



「アイスブレイク」に盛り上がった夕食会
今回のツアーでは、英会話能力を試される場面が多々あった。「世界中の言葉が理解できるのと、動物の言葉が分かるのではどちらがいいか」。

UCLA訪問 ダイナミックな「日本人観」を
多種多様な人種が共存することから「人種のはざま」と形容される米国社会。世界の学生が憧れるカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)に、仙台出身の建築家兼同大建築・都市デザイン学部長を務める阿部仁史教授を訪ね、多人数種社会で考えた「日本人観」「日本文化観」について意見を聞いた。



UCLA訪問 ダイナミックな「日本人観」を
「自身は家族は、妻は父が米国人、母が日本人だが、英語が話せない。息子は約10年の米国暮らしで言語的にはアメリカ人だが、まだ幼い娘は日本語しかできない。私は典型的日本人で英語が話せます。同じ家族なのに「日本人」の幅がこんなにある」と笑った。

谷口 朋さん(福井県立藤島高等学校)
「世界的不平等解消に向けて、もっと消費行動に敏感になろうと思った。今後はフェアトレード商品に積極的に目を向けていきたい」と述べた。

Yusen Terminal社(YTI)を訪ね、ガントリークレーンが船に貨物を整然と積み込む様子を目の当たりにした。

積荷作業が行われている YTIの港湾施設

小川 夏生さん(神田女学園高等学校)
「環境問題に真剣に取り組むことで信用を得て利益を生み出している。企業、地域がWinWinWinの関係にあるのは大切ですね」と話した。

村山 晶彦さん(武蔵高等学校)
「サステナビリティは世の中を良くしていくために必要なこと。日本の企業がその活動と概念を普及していく一翼を担っていることを知り、日本人としてうれしくなった」と笑顔を見せた。

立派な発電事業に参入した。同発電所はDGC社が米国国内10か所に所有する発電所の一つ。トレーディング主体のビジネスモデルから、多くの分野で事業するものへの運営・経営に参画することで多角的収益をあげるモデルに変化した総合商社ビジネスの一端に触れた。

大手農産物事業会社。特にコーヒ、カカオ、ナッツ類は世界のトップクラスのシェア(占有率)を誇る。環境にも労働者の人権にも配慮し、農業生産から加工まで持続可能なバリューチェーンを構築している。

高橋さん「OIAM社は様々なビジネスのチャンネルを持つ。両社が強みとする商品、地域、事業領域を合わせると、さらなる事業展開が望める」と説明する。

念と重なる。両社が2015年8月、資本業務提携を締結した理由だ。

自己表現で磨く 英会話力 臆さずに話してみよう

英会話能力を磨くには、英語を頭の中で組み合わせて話そうとするのではなく、実際に話さなければいけません。

点とはさほど関係がない。佐藤美さん(渋谷教育学園渋谷高校)は「新しい英語力のため、物おじして聞きたいことも聞けない状況に陥ることがあった。英語の勉強を頑張ると、堂々と話せるようになった」と気を引き締めた。

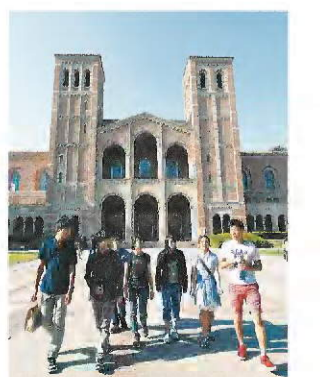
USHIとして受け入れられ、本物のUSHIが広がるきっかけになっている。「日本」「日本人」をダイナミックにとらえるほうが、いろいろな可能性が生まれるのではないかと持論を披露し、高校生たちに「ぜひ、みんなも考えてみて」と語りかけた。



セテイル火力発電所

高校生を世界へ 海外プロジェクト探検隊

読売新聞社が日本の高校生を「記者」として選抜して海外へ派遣、現地取材や体験の内容を高校生に読売新聞や読売中高生新聞紙などで発信してもらうシリーズ企画。三菱商事が手がけるビジネス現場を訪問するほか、現地の人々との国際交流や社会、文化を学ぶプログラムを通じて、総合商社への理解を深め、外国文化への関心を高めてもらうのが目的だ。



UCLA内を見学する高校生